ルイ・アルチュセール
終わりなき不安夢
夢話 1941-1967
市田良彦訳

書肆心水
Louis ALTHUSSER

DES RÊVES D’ANGOISSE SANS FIN
Récits de rêves (1941-1967) suivi de UN MEURTRE À DEUX (1985)

© Éditions GRASSET & FASQUELLE et IMEC, 2015

This book is published in Japan by arrangement with GRASSET & FASQUELLE, through le Bureau des Copyrights Français, Tokyo.
終わりなき不安夢

次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com
夢を読む… ●市田良彦
257

解説
アルクセールにおける精神分析の理論と実践… ●市田良彦
216

エピローグ
一人で行われた一つの殺人
主治医作を騙るアルクセールの手記
235

c. 創作夢
201

b. 家族の暮らし
165

12
日付なし

13
強烈な性夢

謝辞
256

1 無力と闘う "戦略/演出" とアルクセールの哲学 (2) "ピッコロ、ベルトラッチーとデシート" 198

2 アルクセールの認知時代を通じての夢

3 第三のラボ・リヴィエール、ルイ・アルクセール "未来は長く続く" (3) 305

4 AIE (家庭のディオロジー) 裝置の力 "未来は長く続く" (2) 289

5 第三のラボ・リヴィエール "未来は長く続く" (1) 283

6 "未来は長く続く" (1) 266
終わりなき不安夢

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com
まえがき

アルチュセールは多くの夢を見た。やたらに見る。いちいち書きとりたりしないが、見すぎた。
一九四七年九月、すでにパートナーであった将来の妻エレースに宛てた初期の手紙の一つに、そう記されている。出会ってもない頃であったその少し前には、彼がどうかと言えば「おもしろい（ママ）と思う夢の話を彼女に書き送っている。死んだ友人たちが賑やかなる夢である。とてもいい夢かどうかわからない」現実には、少しあとにエレースに明かしているように、彼の夢には「ひどい悪夢」が多かったのである。何日かして、昼間はなにもかもうまくいった日の翌日、彼女にこう書き送っている。「悪夢だった。……」

大量の夢、うなされる夢の数々のうち、アルチュセールは一部を記録して保存していた。タイプライターで打ったものさえある。彼の書庫には一九四七年から六七年までのそうした記録がいく
もっと残されている。独立した夢話もあれば、「日記」の断片もある。「日記」は日付の付いたノートからなっており、女性たち（エレース、クレール、フランカが主である）や近親者（未来は長く続き）を書いていた一九五五年の春に特におそそうである。さらに彼の分析家たちのことが記されていた。

本書の編纂者は、説明の必要な複雑な作業となった。その理由と編纂方針を明らかにしたとある。そして、なぜ今なのか。哲学者の夢に、なぜ個別の著作という境遇を与えるのか。そして、なぜ今なのか。哲学者の夢に、なぜ個別の著作という境遇を与えるのか。そして、なぜ今なのか。

(1) Louis Althusser, Lettre à Hélène Grasset, INED, 2011, P. 76. (ルイ・アルチューゼール『エレースへの手紙』未邦訳。アルチューゼールの死後出版全般について、本書の巻末リストを参照。)

(2) 本書の『解説』エレースとそのライバルたちを参照。

(3) 『訳注』ルイ・アルチューゼール『未来は長く続く』宮林寛訳、河出書房新社、二〇〇三年。
非同质化
アルチュセール略年譜

一九〇八年
○歳
一〇月一六日アルチュ近郊で生まれる。

一九一〇年
三歳
妹ホルジェット生まれる。

一九一二年
四歳
父の勤務によりマルセイユに移る。

一九三〇年
八歳
父の勤務によりリヨンに移る。

一九三六年
三〇歳
抑鬱症状が現れる。周囲には猩紅熱を偽装。

一九三九年
一〇歳
七月高等師範学校文科合格。九月召集札状が届く。

一九四〇年
二〇歳
出征後まもない五月、フランス国内で部隊ごとドイツ軍の捕虜となり、ドイツ領内に捕

一九四五年
二七歳
五月復員。母と妹がモルヴァンから帰還していたカザブランカ（モロッコ）に行く。妹

一九四六年
二八歳
モルヴァンに転居。以降、そこで暮らす。

一九四七年
二九歳
三月から休養のためサンタナ病院に入院し、早発性筋萎（現在の統合失調症）と診断され

一九四八年
三〇歳
エラース・リトマンと出会う。

母はモルヴァンに転居。以降、そこで暮らす。

九月高等師範学校に復学し、妹とともにパリに移る。

が、入院中に病名を躁鬱病と誤診され

電気ショック療法を受ける。

一〇月DES（高等研究免
プレリュード
夢はつねに生に先んじる
クレールの二つの夢についての解釈
クレールへの手紙（1958 年 2 月）
土曜一六時三〇分
五八年二月二三日

いとしい人へ

きみの夢について。

ジュリーが登場する夢。

きみの目の前で、ぼくがジュリーとセックスする。そこできみによう。ぼくにある影響がある。ぼくにある影響がある。ぼくにはきみのことを知らない。

きみにもわかるだろう。ぼくはきみのことを知らない。ぼくにはきみのことを知らない。

きみも前にくらがそれを知ることになるはずです。当事者は隠れた意味をつねに最後に知られることなく、いつだってかきの語ってくれた。エロチックなテーマにきみが惹かれるという話と、すぐにこう付け加えていたから。そもそもまだそんな歳じゃないし。こうしたテーマに結びついて、明白な観念もある。きみがかこうのエロチックなゲームに加わっていれば、きみとの
一九五八年二月一日付、ルイ・アルチェールに宛てたクレールの手紙から抜粋する。

それに、あなたに見せたことにあたる。

『ジュリー』とぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであっている。

ケツレミメにならないということがある。

現実の人物ではない、ということ。

ぼくはとぼくであいている。
解説

エレーヌとそのライバルたち

エレース・リトマノ。二九一〇年、パリで東欧系ユダヤ人夫婦の末子として生まれる。アルチュールより八歳年上である。未来は長く続く。彼女が住むエリアの母親を、それから犯罪で失っている。しかも二人とも、彼女は二歳のときに父親を、一三歳のときに母親を、それぞれと犯罪で失っている。医者があげれば犯罪にいたかったらうか。とにかく、二七歳のアルチュールと出会う。

一九四六年一月には、彼女によう身寄りがなかった。ラミーゼルと呼ばれる、ヴィシーのルガリアン、マルタ、プレウスト、といった組織名を使い分ける、リヨンの拠点にするレジスタンスの「共産党員」活動家。彼女は危険な物質を生産していた。政治的に正反対の向きをもつかもあたった。
- 1 -
1941
潜水艦でクルージング
二月七日

裸の死体の山、遠ざかる飛行機。機銃掃射。ついて静寂。ぼくは彼女を見つめ、動揺している。しかしそれをどう彼女にわかりせればよいのか。これから彼女とセックスすることになるだろう。と、もう感情の前に進み出、彼女の柔らかい手を、唇に長く押しつけている。シモが操船している。だがどこへ向かっているのだろう。朝露

潜水艦でクルージングする夢。
のなかから突然海岸が姿を現す。夜のあいだはノルウェー　の沿岸についていたけれども、実際のところ、特徴的な風景。切り立った海岸、粘土質の地面、丘の腹には生育は悪いが青々とした松の木、赤い屋根、なにより、みごとな艦船、真新しい木で作られたカッペル船だ。驚異的なマスト群、視線は天を仰ぐ。キル部分と船底には美しい絵が描かれている。ぼんけばそれを見向上げる。そして奇妙な建物の数々。潜水艦は海岸をただ一隻、巡航している。シンモンは見て。

（6）一九三四年二月六日にパリで起きた、極右のデモ。いわゆるスタヴィスキー事件（ユダヤ系銀行家スタヴィスキーが、政府高官を巻き込んだ詐欺事件）を起こし、逃亡の末に自殺した。真相発覚を恐れた政府により組織された。

【サンシャ・シンモン。ナチスで東部共和国派紙の記者を務める。アルチェルヌール在籍者。有数の伝記作家ヤン・ムリエ・プーターニの父。】の Sinclair, La Mort, Nancy, édition Délitrac, 1947。
二日のあいだを置いて見た二つの夢

(1) ぼくは妹を殺さねばならない。あるいは、彼女は死なねばならない。そこには避けることのできない義務。とはいえ同意のもとに殺す。それは償いかえるにあたるものを思い出させる。どこかわからないうち、彼女にとまってよいことをするために見たような。その感覚は母たちが妹である妹、姉妹の粋の首、喉を彼女にとってよいことをするための見出しそうな。セックスの後味のようなもの、母か妹の胸器、作を起こしたあたたかい。彼女たちによければ介抱するのだが、それをするためには、彼らの裸身、性
日付なし
強烈な性夢
端から端まで性的な、強烈な夢を見た。ぼくは田舎の戸外にいる。はじめての場所ではない。立つ
たまま、裸の母と長時間セックスする。乳房は垂れているが、垂れすぎというわけではない。疲せ
ており、肌は褐色。そのあと、つぎからつぎにセックスしまくり、やっとは漁るを繰り返す。家の
なかのある部屋で、娘を追い回し、彼女の部屋でセックスする。そのまま時間が過ぎる（入学試験
の準備期間だった——これまでの夢のテーマを反復している。ぼくは専門を変更するので、受験し
直さなくてはならない）。しかし今回の準備では、エディエンスとマシュレは受験勉強を終えたば
かりだったので、ぼくは写すだけでいいと知っている。つまりその点では抜かりなく。ぼくはセッ
クスに耽ることができる。ぼくは巨根である。セックスするのが難しいほど。彼女の性器が男性性器
にねじ込まれなければならないが、彼女の性器は男性性器のかたちをしている。娘が逃げる回っても、ぼ
くの都度彼女を捕まえてセックスする。とはいえ危険なもあった。周囲に人がいるのだ。しか
しあぼくは無視する。家に戻ろうと、田園地帯の高いところに向かい、湿地帯だが低い下り道を見つ
ける。娘は弱々しく、ほとんどの病人でずっと横になっている。娘が逃げ回っても、ぼ
くはセックスする。リスクは色々あるといいうのに。つぎにぼくは、その家の近くにもう一軒、家があるのを
解説
アルチューセールにおける精神分析の理論と実践

市田良彦

アルチューセールと精神分析の関係は、まっさらカンとの関係が問題になる。論文ノートかを問わず、精神分析についてアルチューセールが主題的に書き残したテキストは、すべて、彼が「ラカン理論」を知ってからのものだ。そして、その初の精華である「フロイトとラカン―九六四四」は、「ラカンが声高に求めるフロイトへの回帰」を重ね合わせ、ラカンに新しい読者と聴衆を与えることになった。そこでラカン精神分析への個人的実践的な関係において、アルチューセールは生涯、そんな理論的関係から推定されるようなものを遠ざけているように見える。結果的には、巻子に横たわったときである。正確な日付は分からない。本書編者は一九五六年と記している。いずれにしても、親友のジャック・マルタンに誘われて、アルチューセール精神分析への一歩を踏み出した。
書誌情報提供サンプル/個人使用の範囲でお願い致します

1. このテキストは最初、共産党系の批評誌『新批評』（一九六四年二月—一九六五年二月）に掲載される。共産党は当時精神分析を反動的イデオロギーとみなしていた時代である。とはいえ二人は、『共産党』や『唯物論』に疑いを差し挟みながらも、ステレンンのもとに通っていたわけではない。アルチュセールの回想によれば、マルクスは社会主義を「ソビエト＋電力＋精神分析」と定義していたという。レーニンの定義では、マルクスはソビエトへの回帰を求めてはおり、最初の一歩を踏み出すことができたようである。ただし、ステレンンは『プロイドへの回帰』が遠い人だ。ラカンはどこまでも医師であり、一九三二年に設立されたフランス最初の精神分析家集団であるパリ精神分析協会（SPP）とも、一九五三年にそこかしわで行なったユーザーメークの会議に参加したとされている。

2. 訳文は変更したところがある。

3. 石田靖夫ほか訳、人文書院、一九七五年一月、で読むことができる。同書からの引用はこの邦訳によるが、едакtor.
エピローグ
二人で行われた一つの殺人
主治医作を騙るアルチュセールの手記
それは長く、長く、果てしなかった。尋常ではない病の力。ぼくはこれほど不安を抱えた人物をほとんど見たことがない。これほど強く、これほど日々何時間も続き、これほど長期にわたる不安をほとんど知らない。

この不安は様々な仕方で現れた……。（きみは）きみは錯乱現象に見舞われるたびごとに、きみ自身が恐怖を味わうだけでなく、きみを知るすべての人たちを恐怖に陥れた。そして錯乱は、ほとんどのねにあった。錯乱に陥ると、夢の幻覚が生まれる。夢の幻覚はそのまま覚醒状態に持ち越され、現実のものとして体験され、知覚の働きをわかったあと、きみはくたびれ果てており、一日の残りをつぎの夜の衝撃への準備に費やすことになる。

錯乱と夢幻症には、一連の強い恐怖感がともなっていた。

1. 捨てられるようにに対する恐怖がバーニックを引き起こす。（だれかがきみを不安のなかに置き去りにする別離へは、訪問が終わったということが真のトラウマになる。）きみを不安のなかに置き去りにする別離へは、訪問が終わったということが真のトラウマになる。きみを不安のなかに置き去りにする別離へは、訪問が終わったということが真のトラウマになる。

この恐怖と闘うために、きみはだれかが、たとえ黙ったままであっても物理的にそこにい
書肆心水提案サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

夢を読む 市田良彦

SAMPLE
Shinsui-Shinsui.com
夢話と三つの「自伝」が作る環——哲学者の「自己への関係」

1

アルチュールはなぜ夢の記録を綴ったのだろうか。まず考えられる理由は、編者オーヴィエ・コトルの「まえがき」にあり、あまりにたとさんの夢を見たからだろう。それらの多くは夢を見た当人によれば、目覚めてからの生を侵食するほど不安の強度をもっていた。だからこそ、書くことによって内容や意味を確定し、距離ある過去をものにしてしなければ、新しい現在をとりあえずはじめる必要があるだろう。夢を綴ることはまず、気分の切り替えに必要な作業であったはずである。そして、本書の冒頭に収録された恋人への手紙が語っているように、夢はやがて事実となる予言的力がそなわっているとアルチュールが信じていたことも、夢話が収録として残された理由の一つであろう。どこからそんな「夢理屈」が彼の半意識に根づくことになったのか。夢を占いながらに「知る」ためには、彼は夢を意識的ないものを、それは彼の著作群を今日なお説明する者にとどまり、読者として、またアルチュールの専門家とみなされることを受け入れてきた人間としても。ま
アルチュセールの死後出版著作
（生前刊行著作の再刊を除く）

1.

Stock/IMEC刊

アルチュセールの遺稿と蔵書が保管されているIMEC（現代出版史資料館）のオリヴィエ・コルベ館長監修のもと編纂され、Stock社から出版されたシリーズ。

L’avenir dure longtemps suivi de Les Faits ................................................................. 1992
—1985年の『未来は長く続く』と1976年の『事実』を収録。
—伝記作者のヤン・ムーリエ・ブータンが共編者として名を連ねる。
—2002年に『未来は長く続く——アルチュセール自伝』として、河出書房新社より邦訳出版（宮川寛訳）。原著の編者解説は含まれない。
—1994年に多数の資料を加えた増補新版（ボケットブック版）が初版と同じ版元から刊行され、2007年に再刊。
—2013年に増補新版がそのままFlammarion社の「Champs」叢書に移され、再刊。

Journal de captivité, Stalag XA, 1940-1945 : carnets, correspondances, textes ................................................................. 1992
—第二次大戦中の捕虜時代の日記、未邦訳。
—ヤン・ムーリエ・ブータンが共編者として名を連ねる。

Écrits sur la psychanalyse : Freud et Lacan ................................................................. 1993
—フランソワ・マトゥロンが共編者として名を連ねる。
—2001年に『フロイトとラカン——精神分析論集』として、人文書院より邦訳出版（石田靖夫／小倉孝誠／菅野賢治訳）。

Écrits philosophiques et politiques, tome I ................................................................. 1994
—編者はフランソワ・マトゥロン。
—1999年に『哲学・政治著作集』Iとして、藤原書店より邦訳出版（市田良彦／福井和美／宇城輝人／前川真行／安川慶治訳）。

316